安中市伝統の自性寺焼で MY食器を作ろう！

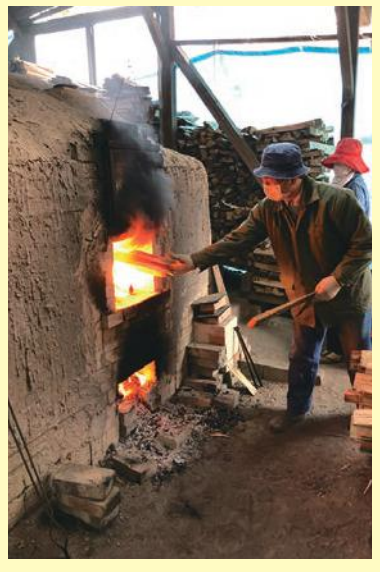
今回の先生は…　名工 青木　昇 先生

1946年前橋市生まれ。独学で陶芸を志し、水沢にて陶芸苑を開設。その後1979年に古窯跡近くに里秋窯を開設し、自性寺焼の復興を成す。
2000年に群馬県ふるさと伝統工芸士に認定され、2007年には現代の名工厚生労働大臣表彰を受賞。2012年には黄綬褒章、2016年には群馬県功労賞を受賞。現在も多くの作品を創作し多数個展を開催。安中市指定重要無形文化財。

これぞ職人技

穴窯で焼きあげる本気の7日間

陶芸というと薪で焼き上げるものをイメージしがちですが、現代ではガスや電気を使った窯も多く使われるようになりました。というのも薪を使用した窯は期間中、常に薪をくべ続ける労力と時間の拘束、また使用する薪に莫大な費用が掛かるからです。それでも電気やガスの窯とは違い、木材の炎で焼き上げることで、火の流れや灰のかかり方など、作品を置いた場所の違いだけでも焼き上がりの表情が一つ一つ変わってくるのが大きな魅力であり薪窯の醍醐味といえるでしょう。
里秋窯でも2月下旬、今年の穴窯焼きが行われました。10tものアカマツを使用し、1週間昼夜を問わず、門下生と交替しながら薪をくべ続けます。窯の中は1100度を超え、周囲も雪がちらつく季節だというのに汗が出る暑さ。先生も窯焚きの際は火が燃え移らないように必ず綿の服を着ているのだそう。
その後、高温で焼かれた作品はじっくりと温度が下がるのを待ち、窯出しされるのです。



▲窯の中には約500点の作品がぎっしりと並べられています。

地元産の陶土にこだわり続ける伝統の工芸品「自性寺焼」を体験！

今回のあんチョコ隊は
安中が誇る伝統工芸品
自性寺焼 里秋窯さんで
『手捻り作陶』に挑戦 !!
大騒ぎの３人組。
どんな作品が出来上がるかな？？

自性寺焼とは

かつて安中市下秋間一帯は、良質陶土に恵まれ発展した陶器の里でした。奈良時代・平安時代の須恵器の破片なども多く出土し、江戸時代中期から明治時代には日用品の器類を多く生産していたとされています。しかし、日露戦争へ多くの職人たちが出兵したのを機に、最後の窯が益子町へ移るとともに一時途絶えました。1979年に現代の名工、青木昇氏により再びその息吹を吹き返し、現在に至ります。